

## [成果情報名]スモモ、オウトウの緑枝接ぎを用いた効率的な交雑実生接木苗の育成

[要約]スモモ、オウトウともに 15cm 程度に生育した幼苗の新梢で緑枝接ぎを行うと、活着率は高く、接ぎ木後の生育も良好であり、交雑から 2 年で定植可能な大きさの交雑実生苗が育成できる。

[担当]果樹試・育種部・落葉果樹育種科・新谷勝広

[分類]研究・参考

---

### [背景・ねらい]

スモモやオウトウの交雑実生においては、自根樹は接ぎ木樹に比較して樹勢が旺盛であるため、結実が遅れることや、着果が不安定なことがある。また、生産現場では接ぎ木樹が主流であるため、品種育成にあたっては接ぎ木樹による選抜が望ましい。しかし、交雑実生の接ぎ木苗の育成には、播種した交雑実生と台木を 1 年間養成し、2 年目に接ぎ木を行うため、定植できるまでに交雑後最低 3 年を要する。

そこで、幼苗での緑枝接ぎによる育苗期間の短縮方法を検討する。

### [成果の内容・特徴]

1. スモモ、オウトウの交雑実生と台木品種をガラス温室（昼温 25℃ 夜温 17～20℃）で養成すると、播種後 60 日程度で新梢長 15cm 程度、径 2.0mm 程度（データ省略）の大きさに生育し、緑枝接ぎが可能となる。
2. 緑枝接ぎの方法は次のとおりである（図 1、2）。
  - 1) 台木の新梢を地際もしくは発生部位から 5.0cm 程度残して剪除する。
  - 2) 剪除した切り口から縦に 1.0cm 程度切り込みを入れる。
  - 3) 穂木は 3cm 程度の長さにし（葉柄基部から新梢が発生するため穂木は葉柄基部を 2 カ所含むこと）、接合部位は 1.0cm 程度くさび状にして接ぎ木する。
3. 接ぎ木後の活着率は、スモモ、オウトウともに非常に高く、いずれも 90%以上である（表 1）。
4. 定植時の生育量は、自根樹と比較して同程度かそれ以上であり（表 2）、交雑 2 年目で定植できる。これにより、慣行の接ぎ木苗を育成する方法に比べ最低 1 年育苗期間を短縮できる。

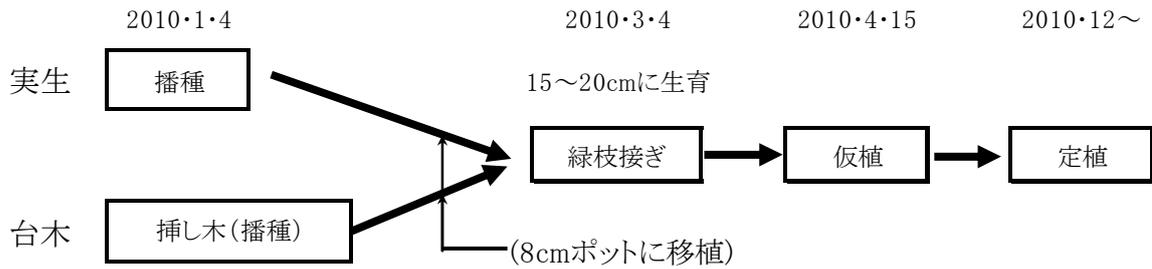
### [成果の活用上の留意点]

1. 緑枝接ぎは、本試験で実施した時期以外にも、新梢が生育している期間であればいつでも可能である。
2. 本法は、モモでも実施可能である。
3. 接ぎ木にはカミソリの刃のような薄くて良く切れるものを用いる。切り出しナイフは不適である。接ぎ木テープは軟らかく伸縮性のあるものを用いる。

### [期待される効果]

1. これまでより短期間で選抜が可能となる。

[具体的データ]



(昼温25℃、夜温17～20℃の加温施設で管理)

図1 幼苗での緑枝接ぎによるオウトウ接ぎ木苗作成の例 (2010)



図2 スモモでの緑枝接ぎ (左：台木へ切り込みを入れる 右：穂木を接木する)

表1 スモモおよびオウトウ実生の幼苗での緑枝接ぎによる活着率

試験樹種	試験年次	個体数	活着数	活着率 <sup>2</sup> (%)
スモモ	2008	43	41	95.3
	2009	85	83	97.6
	2010	62	56	90.3 <sup>3</sup>
オウトウ	2010	64	61	95.3

<sup>2</sup>活着したが、葉芽がなく発芽しなかった個体は接ぎ落ちとした  
<sup>3</sup>全ての個体で活着したが、6個体は葉芽が無く生育せず

表2 スモモおよびオウトウにおける緑枝樹および自根樹の定植時の生育量

調査樹種	調査個体数	緑枝		自根	
		幹周 (cm)	新梢長 (cm)	幹周 (cm)	新梢長 (cm)
スモモ	83	2.4	122.8	2.3	81.3
オウトウ	9	3.0	82.3	2.5	69.8

\*スモモは2009年、オウトウは2010年のデータ

[その他]

研究課題名：接ぎ木技術を用いた効率的な育種手法の確立

予算区分：県単

研究期間：2009～2013 年度

研究担当者：新谷勝広、三宅正則、佐藤明子、雨宮秀仁